超絶最狂学園

yousyun1996

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
超絶最狂学園

【Ｎコード】
Ｎ０６０４Ｘ

【作者名】
ｙｏｕｓｙｕｎ１９９６

【あらすじ】
いつも通りのつまらない日常。がある日を境に変わる日常。人外までもが現れるなか、優達はどう切り抜けるのか？学園アクションコメディ　（パロディ有り）間違いがあれば、教えていただけると嬉しいです。

第1話　平和な日常。からの闘い（前書き）

初めまして。
今回初投稿になります。
暖かい目で見てくださると嬉しいです。

第1話　平和な日常。からの闘い

○○市立○○中学校の2年A組の教室にて

「あ～暇だ…」

そうつぶやくのは、この物語の主人公の1人。

名前は、龍沢　優（たきざわ　ゆう）　14歳。168cm。

今日もいつも通りのつまらない平日。何でこう、学校って、つまらないんだ…　だれか理由を教えてくれ…

机に肘を付き、窓から見える景色を眺めて、そんなことを考えていると、

「…～ぃ」

誰かの声が聞こえるような…

「ぉ～ い」

あれ？本当に聞こえる？

「うぉーーい？」

「うわっ？」

耳元ででかい声で急に怒鳴られて、思わずびっくりした。

「目、覚めた？」

「お前か。」

俺の耳元で怒鳴ったこいつは、

大島　茜　（おおしま　あかね）　１４歳　１６０ｃｍ

かなりの美少女だが、かなり冷徹その上、性格が悪い

「寝てねーよ」

「寝てるっぽかったから」

「二人とも、ちょっといいですカ？」

慌てた様子で俺達を訪ねてきたのは、

アントニオン・ライブラリー　１４歳　１８０ｃｍ

中学生とは思えない程の長身　名前の通り帰国子女である

俺らは　（アントニー）と呼んでる

「どうしたんだよ？」

「大変なんでス！」

「何が？ん？」

アントニーが指を指した方向を見てみると、

そこには、

「オラオラ〜？」

ヤンキーの連中が学校の校庭に群がっていた。
すると、一人、リーダーらしきクールな人が、
「この学園に強い奴がいると聞いた。そいつは誰か教えて欲しい。」
なるほど。そう言うことか。

〜茜視点〜

どうやら闘う相手を探しているようね。
でもこの学園にケンカの強い奴なんて…

「お〜い！相手探してんだろ？だったら俺が代わりやってやる。」

この声は？優？一体なんで？

「あんた何言ってんの？相手は「まぁ見てな。」」

そう言うと優は教室を出て行き、ものの２０秒で校庭へ出た。
心配なので、私もアントニーを連れて校庭に出る事にした。

「行こう！アントニー！」

「あ、茜さン？待ってくださイ？」

〜続く〜

第1話　平和な日常。からの闘い（後書き）

どうでしたか？
僕としては満足の出来です。
また次回もよろしくお願いします。

第2話　平和な日常。からの闘いその2（前書き）

2話目です。
優が強いです！
元々、闘うんで良いと思ってます。
以上です。
それでは、楽しんで行って下さい。

第2話　平和な日常。からの闘いその2

〇〇私立〇〇学園の校庭にて、

～茜視点～

私はアントニオンを連れて校庭に出た。その光景は、

「「？」」

私とアントニオンは同時に驚いた訳、それは、

「どうした？全員まとめて速攻で終了とか、ないぜ。」

「く…クソ～」

見てみると、周りにいた不良達がみんな倒れている。
中には、数十メートル遠くに飛ばされた者もいた。

「最後はあんただ。」

「結構やるな…」

リーダーらしき人物は少々焦っているようね。

？「一応、自己紹介して置こうか？」

優「そうだな。俺の名前は優、瀧沢　優。」

？「優か、俺の名前は松坂　紫苑　（まつざか　しおん）　だ。」

優「じゃあ、そろそろ…」

紫「行くか…。」

～ｏｕｔｓｉｄｅ～

二人とも臨戦体制をとり、互いの攻撃に備える。
そして、

優「行くぞ？」

紫「はぁぁあああああ！？」

思いっ切り突っ込み、攻撃を放つ。
紫苑が優の顔面向けて、右ストレートを放つ。

優「フン！」

が、しかし、サッと首で避け、優は左ボディを紫苑の腹に打ち込む。

紫「ぐふっ？」

腹を殴られ、息が漏れる。
だが、痛みに耐え、再び優の顔面へ右ストレートを放つ。

バキッ！

今度はヒットした。
だが、

優「…」

うんともすんとも言わない。
まるで痛みなど無いような。

紫「な、何？」

優「どうした？それで本気か？」

そう、彼に対して今のパンチは全く効いていなかった。
そして優は紫苑の腕を掴み、地面に投げ倒した。

紫「うはっ！！」

ヤンキーの群れは、全員、優によって、全滅した。

優「これで一件落着だな。」

紫「なぁ、一ついいか？」

よろよろと立ち上がり、優に質問する紫苑。

優「何だよ？」

紫「お前、なんでそんなに強いんだ？」

優「う～ん、さあね、中学入る前だし、よくわかんねぇ。」

紫「そっか。じゃあ、俺帰るわ。」

そう言うと、紫苑達は、自分達の学校に帰って行った。

「あ～何か疲れた。今日の給食何かな～、ってあれ？お前らいつからいたんだ？」

どうやら自分の後ろに居た二人の存在に気付いたようだ。

～優視点～

二人とも何やらこちらを見ながら口を開けている。

「おい、どうしたんだよ？口開けてボーっとして。」

「あんた凄く強いね！びっくりしちゃったよ！」

「そうでス！アンビリバボーでス！」

？「おい、そこで騒いでないで早く教室に戻れ！」

出た出た、２年Ａ組学級委員長の板野　牛尾　（いたの　うしお）　１４歳　１６６ｃｍ

銀縁伊達メガネが特徴　ちなみに超がつく程のドジ

そんなことを考えていると、早速、

ドテッ！

石も無いのに転けた。
しかも顔面から地面へ、これは痛い　（いろんな意味で）

「大丈夫か？」

「あぁ、大丈夫だ　問題無い。」

茶色の顔でそう言われる。
まあ…大丈夫だろう。

「それじゃあ、戻るとしますかね。」

そう言い、俺が戻ろうとすると、突然、

「待って、優、その前に保健室行こ。」

「何で？俺は別に大…「良いから行く！」」

～1分後～

？「…」

「先生、どう？」

？「君の事、わかったよ。」

「どうなの？」

？「優君、君の身体能力は、常人の１０倍だ。」

「１０倍？つか、何でわかんの？保健の先生にこんな事。」

「先生は、触れただけで相手の健康状態がわかるの。」

「スゲーけど、先生誰だよ？」

？「自己紹介がまだだったね。僕の名前は　ジャック・バラン　、これからよろしく。」

保健室の先生、なのに男の先生、　ジャック・バラン　　不明
１９５ｃｍ
超イケメンの保健の先生　　ミステリアスな日系アメリカ人
たまに心の中を見透かされているようで気持ち悪い

ジャ「他にも、茜君、君、何か隠しているね。」

優・ア「えっ？」

「か、隠し事なんてないし。（汗）」

ジャ「そうかい？僕の勘違いなら良いんだけど。」

何やら秘密がありそうな茜。
果たしてその正体は？

～続く～

第2話　平和な日常。からの闘いその2（後書き）

次回はキャラ紹介です。
3話は2日後の予定です。
ちなみに松坂　紫苑はこれ以降出ません。
以上です。
それでは、また次回。

超絶最狂学園　キャラ紹介（前書き）

優「今回はキャラ紹介だってな。」

作者「はい、今回は出来るだけ細かく紹介します。」

茜「せっかくなんだからちゃんと書いてよね。」

ア「作者さン、僕の事はあまり…」

優「何だよ？お前も茜みたいに隠してる事あんのか？」

作者「まあ、いずれ解るんで、焦らなくても大丈夫です。それでは。」

超絶最狂学園　キャラ紹介

２年Ａ組のメンバー

瀧沢　優　（たきざわ　ゆう）　１４歳　１６８ｃｍ　男
特徴：髪はストレートで前髪が少し長め。
いつもはおとなしいが、いざとなると、仲間の為に命をかけて闘う。
波動が使える。
戦闘スタイル：素手
身体能力が異常

大島　茜　（おおしま　あかね）　１４歳　１６０ｃｍ　女
特徴：髪はストレートだが、ポニーテールの結び目からボサボサしている。（上巻型）
かなりの美少女だが、時に冷徹で、その上、性格が悪い。たまに普通になる。
戦闘スタイル：剣や刀
龍虎　二刀流とやらを習っているらしい？

アントニオン・ライブラリー　１４歳　１８０ｃｍ　男
特徴：髪はショートアフロの茶髪。
中学生とは思えない程の長身。名前の通り帰国子女である。性格は明るい。
戦闘スタイル：銃器
何か秘密がある様子。

板野　牛尾　（いたの　うしお）　１４歳　１６６ｃｍ　男
特徴：髪はストレートの左の７：３分け。
超がつく程のドジ。銀縁の伊達メガネを掛けている。学級委員長を務めている。
戦闘スタイル：角　（牛がつくだけに）
実は闘えない。

ジャック・バラン　不明　１９５ｃｍ　男
特徴：ボサッとしたストレートヘアーの金髪
超イケメンの保健の先生。日系アメリカ人。
ミステリアスで、たまに心を見透かされているようで気分が悪くなると噂。
戦闘スタイル：銃器　（科学兵器）

運動は苦手。

作者「まあ、ざっとこんなとこです。」

牛「説明が下手だな。」

優「おま？いつからいたんだ？」

牛「俺の説明が入った辺りからだ。それよりも、ドジとはやってくれるな。（怒）」

作者「設定ですから、仕方がないですよ。

ジャ「僕も一ついいかい？運動が苦手と言うのはどうかと思うが。」

優「先生もかよ！あっ、でも確かに運動が苦手には見えないような…」

ジャ「僕は運動が苦手じゃなくて、運動ができないんだ。」

優「もっとダメじゃねぇか？それに気にする所　別にあるだろ！もういい！とっとと終わらせるぞ！」

作者「そうですね、じゃあ、次回にまたお会いしましょう。それでは。」

～3話へ～

超絶最狂学園　キャラ紹介（後書き）

本当に下手です。
次回は茜とアントニオンが闘います。
面白く書ければいいなと思ってます。
それでは、次回に。

第3話　おい？ちょ待て。茜とアントニオンの秘密？（前書き）

こんにちは、または　こんばんは。
今回は茜とアントニオンが一緒に闘います。
ちなみに武器はキャラ紹介がヒントです。
それでは。

第3話　おい？ちょ待て。茜とアントニオンの秘密？

○○学園の教室にて。

誰かが学園を監視している。

？「どうだい？彼等の様子は？」

？「フン？あんなガキの監視をするだと？ふざけるな！」

？「落ち着け、彼等が十分に強くなれば、君も満足する結果になるよ。」

？「そうよ。その為に敵を送っているんだから、それに、坊や達を見ていると、何だか「変な事を考えないようにね。」は～い。」

？「それじゃあ君達、そろそろ行ってくれるかい？」

？「はは！」

？「くっくっく。仰せの通りに。」

～優視点～

「ファ～　、眠いぜ、全く。」

今の時間は１１時。腹減る上に、恐ろしく眠い。
おまけに、昨日の事が原因なのか、今朝から不運の連続で、寝坊で朝飯食い損ねて、道路走ってたらガムや犬のフンを踏んじまうし、一応、関係ないが、誰かに見られているような気がした。物凄く不気味だった。

…

何だろう、とても嫌な予感がする。
どうしよう。

「どうしたんですカ？元気が無いＤｅａｔｈネ。」

「アントニー？お前、です　が　Ｄｅａｔｈになってるぞ？」

「ｏｈ！そうでしたカ！失礼しましタ。」

「そこの二人、何してんの？マンガみたいな事して。」

「茜！これはマンガじゃない！小説だ！」

「何で、委員長が話に入ってくるんだよ？」

「おもしろそうだったから。」

「暇だな！学級委員の仕事どうした？」

「あっ？忘れるとこだった！じゃあな！」

「足元に気をつけろよ！」

「あゝ、わかって…」　ドガッ？　←壁に顔をぶつけた

「ゴメン。前だった。」

「そう…だな。　（痛）　」

相変わらずのドジっぷりを見せてくれる。
しかし、今のは痛そうだ…
そんな事を思っていると、

？「たのもーー！」

気合い入った声でそう叫ぶ誰か。気になったので外に出てみると、

？「お前に決闘を申し込む！」

？「逃げようとしても無駄じゃぞ。」

予感的中。全く、俺はついてないようだ。

「お前ら、一体何者だ。」

？「私の名前は明神　剣之助だ！」（みょうじん　けんのすけ）

「わしの名はＤｒ．バッカナンデスじゃ。おぬしの名前はなんじゃね、若い者。」

「俺は、瀧沢　優だ。」

刀を腰に掛けた大男と、真四角の鉄の塊を背負ったちっちゃい爺さんが、俺に挑んで来た。

茜「…」　スタタタ…

ア「茜さン？どこ行くんですカ？」

～outside～

優「じゃあ…行くぜ！」　ザッ

優は、二人の敵に向かって飛ぶように地を蹴ってダッシュした。

剣「この私の百連剣。とくと味わえ！」スババババッ！

そう言うと、突然突き出した刀が百の刀へと形を成した。

優「うおっ？」

突然の驚きの攻撃を目にして、少し後ろに下がる。

バ「気を抜くなかれ。」

後ろからバッカナンデスが、背負っている鉄の塊を変形させ、その中からアームが出ると、アームがレーザーを高範囲に発射。

優「マジかよ?」

後ろからのレーザー攻撃に驚きながらも、すぐ真上へとジャンプする。

バ「なかなかやるのぉ。」

剣「なら…「待って!」ん?誰だ!」

スタッ

優「お前は！」

優が着地した時に見た人物、それは…

優「茜！」

茜「待った？優。助けにきたよ。」

優「お前、その手に持ってる物って…」

茜の手を見ると、両手に2本の刀が…

剣「ふん！小娘が何の真似だ！」

茜「それだけ？」

剣「？」

茜「言う事はそれだけ？って聞いてるの！」

剣「うるさい？今すぐ黙らせてやる？」

そう剣之助が言うと、刀を構えて走ってくる。

優「茜！危ない！」

優がそう言うと、茜は持っていた刀を抜き、空になった鞘を地面に捨てた。そして…

ガキン？

茜は剣之助の刀を二本の刀で受け止めた。

剣「その刀、知ってるぞ。
右は　名刀　（朱雀）　（スザク）
左は　妖刀　（無幻）　（ムゲン）　だな！だが、何故貴様のような小娘がこの刀を持っているのだ？」

茜「それは私が…龍虎　二刀流の家の子だから。

剣「龍虎　二刀流？」

茜「ええ、明治時代に存在した、伝説の剣術。
それが…龍虎　二刀流！一本の刀は神速の如き一閃を持ち、もう一本の刀は鬼の如き一撃を持つ？
さあ、長い説明はこれで終わり。
あんたもこれで…終わらせる？」

そう言い放つと、剣之助を押し返す。

そして…

「龍虎　二刀流！攻式一ノ型？
秘技？　　朱雀炎舞？？」　（スザクえんぶ）

その瞬間、朱雀と無幻が炎を帯び、茜は回転しながら剣之助を斬り上げた。

剣「ぐあああぁぁぁぁ？」

剣之助は火だるまになりながら、空高く舞い上がり、地面に叩きつけられた。

ドサッ

茜「小娘だからって、甘く見るからよ。」

そう言い捨て、落とした鞘を拾い、刀をしまった。

バ「くっ！役立たずが！」

ア「僕を忘れては困りまス。ミサイルボンバー！」

アントニオンはそう言うと、何と！アフロヘアーの中からミサイルが飛び出て来た。

それを見た優と茜は…

優・茜「どっからミサイル出してんだよ　（のよ）？？」

鋭いツッコミが入るが、そんな事は気にせず、ミサイルを撃ち続けるアントニオン。
だが、バッカナンデスは鉄の塊から再びアームを出し、ジャンプして避ける。

バ「こんなおもちゃでわしを倒せると思うな！」

ア「そうですネ。では、これならどうですカ？」

アントニオンはそう言うと、手を前に出し、指パッチンをしようとしている。

バ「それがどうした？」

ア「行きますヨ！」
「マインドクラッシュ？」

その時、指がパチンと音を発てる。すると…
バッカナンデスの真下から眩い閃光が放たれる。
その瞬間…

ズガーーーン??

強力なエネルギー爆発が起こり、その爆発のエネルギーがバッカナンデスを呑み込み、消し去った。

ア「大丈夫ですカ?優さン、茜さン。」

優・茜「・・・」

アントニオンが闘う一部始終見ている為、開いた口が塞がらないでいる。

ジャ「驚いたかい?」

優・茜「うわっ??」

アントニオンで驚いた上に、突然、優達の横にジャックが現れた為、驚き、逆に落ち着いた。

ジャ「実はね、アントニオンは僕が造ったサイボーグなのさ。」

優・茜「・・・　（呆）　」

信じられない驚きの連続でさすがの二人も呆れた様子。

ア「今まで隠していて、すみません。でも、いつか言おうと思ってたんですが、まさかこんな形になるなんテ…」

優「何言ってんだよ！お前が何だろうと、俺らの親友には変わり無いだろ。」

茜「そうだよ！私達は決してアントニーを嫌いにならないよ。」

ア「優さん…茜さん…」

ジャ「良い友達を持ったね、アントニオン。」

実はサイボーグだったアントニオン。
だけど彼は友情に恵まれていた。
友情とは良いものである。

〜続く〜

第3話　おい？ちょ待て。茜とアントニオンの秘密？（後書き）

今回は少し長くなりました。
長いと疲れますね。
次回は委員長と先生が闘います。
大変な事になりそうな気がします。
今日は以上です。

第４話　まだまだだ！二人の脇役　牛尾とジャック！（前書き）

牛・ジャ「おい？脇役ってどう言ういｍ「削除」
うぎゃあああぁぁぁぁ！！！」

優・茜・ア「…恐？？」

作者「失礼しました。では、４話をどうぞ。」

第４話　まだまだだ！二人の脇役　牛尾とジャック！

○○学園　教室

～優視点～

優「…にしても、茜が刀を使えたとは…結構驚いたぞ。」

茜「そう？でも、私だって優があんな力を持ってた事も驚きだと思うけど。」

ア「僕だって、優さンや茜さンがあんなに闘えるなんて、僕はとっても驚きましタ。」

優・茜「俺は　（私は）　お前が　（あんたが）　サイボーグだった事がもっと驚きだ！！！！！」

ア「は…はイ…」

優「でも、何で、学園の校庭前であんな騒ぎがあったのに、何で何も言われないんだ？」

牛「書くだけめんどくさいし、格好悪いから。と、作者からの伝言だ。」

優「またか委員長？今度は何だ！」

牛「ジャック先生が優達を連れて来いって言っている。重要な話があるらしいぞ。どうする？行くか？」

優「重要か…とりあえず、行ってみよう。」

～保健室～

優「先生、どうしたんだよ?急に呼び出して。」

ジャ「来たかい。まぁ、座りなよ。」

先生に言われ、座る俺達。
すると茜が先に口を開いた。

茜「先生、何ですか?話って?何かあったんですか?」

ジャ「実は、怪物が近づいているようなんだよ。」

優・茜・ア・牛「怪物??」

優「何でわかるんだよ?」

ジャ「それはこのレーダーのおかげさ。」

そう言うとジャックは、白衣のポケットから四角いレーダーを出した。

ジャ「名付けて、モンスターレーダーだ。」

優「そのまんまじゃん！つか、何でこんな物持ってるんだよ？」

ジャ「僕は医者であり、科学者でもある。」

優「マジか…」

ジャ「まぁ、とりあえず、これを見てくれ。」

ジャックはレーダーを俺達の前に差し出す。
そこに映っていたのは緑色の丸い点だった。

ジャ「この中心が学園だ。で、この外にある点が怪物さ。」

ドゴーン？

ジャックがレーダーの説明をしていると、突然、校庭から豪音が鳴り響いた。

ジャ「どうやら来たみたいだよ。

優「んじゃ、行きますか！」

茜「うん。」

ア「はイ。」

そう言うと、俺達は校庭に向かって走り出した。

～outside～

優「…何なんだよ…こいつ…」

茜「ＴＨＥ・バケモノって感じね…」

ア「大き過ぎまス…」

予想以上のデカさを誇る、犬の怪物。
怪物の背中には誰か乗っているようだ。

？「どうですか？僕のベルちゃんは。」

優・茜・ア「ベルちゃん？」

？「はい、名前はベルケロスです。ちなみに、僕の名前はアルベ・ルークです。以後お見知りおきを。」

どうやら怪物の名前はベルケロス、怪物の飼い主の名前はアルベ・ルークと、言うようだ。

牛「じゃあアルベ、ベルケロス、来て早々悪いが、お引き取り願おうか。」

優達とアルベは声のする方向を向いて見ると、そこには、牛尾が立っていた。

アル「誰だい？君は。」

牛「俺の名前は板野　　牛尾だ！帰る気が無いなら、力づくで帰らせるだけだ！」

牛尾はそう言うと、ブレザーのポケットから角を取り出した。

アル「何の真似だい？」

牛「言ってろ。」

そう言い、牛尾は小さい角を頭に取り付けた。
すると、角が電気を帯びてきた。

優「おまっそれ？ラ〇ボの角じゃねぇか？」

牛「優、そこを気にしたら負けだ。」

徐々に帯びた電気が強くなっていき、角も伸び始め、最終的に角の長さは3メートルにもなり、激しく発光している。

牛「さあ、行くぞ？くらえ！」
「猛牛突き！！！」

そう叫び、思いっきりベルケロスに向かって角を向けて突進した。

牛「うぉぉおおりゃああ？？」

ブスッ！

牛尾は角をベルケロスの脚に突き刺す。

ベル「グオオオオオオ！！」

牛「これで終わらねぇぞ？」

そう言うと、牛尾は角から１０万ボルトの電気をベルケロスの脚に流し込む。

ビリビリビリビリッ！

ベル「グアアアアア？」

シューー

牛「どうだ？」

アル「甘いね。」

ベル「グルルル…」

牛「なっ?何だと?」

牛尾の全力の攻撃も虚しく、ベルケロスが脚を払うと、牛尾の角が抜けてしまい、数メートル飛ばされた。

牛「うぐぁ??」

アル「悪いけど、ここで死んでもらうよ。」

牛尾がベルケロスの足に踏み潰されようとした、その時…

茜「何やってんのよ!全く?」

茜が牛尾の目の前に現れた。

アル「もう遅い、仲良く死んでもらうよ。」

バイーーン！

アル「何？」

なんと、茜の目の前にオレンジ色のバリアが張られた。

優「茜？それはもしやA〇〇ールドじゃないか？」

茜「あまり気にしないでくれない？私は心の幅を小さくすると心の壁を展開できるの。」

ア「それって、ネガティブになるという事ですカ？」

茜「そう言う事。じゃ、そろそろ決める！」

茜はそう言うと、背中に掛けてた長さ７０ｃｍの剣を抜き、そして…

茜「龍虎　二刀流？攻式二ノ型！」
「風神の竜巻・雷神の雷！！！」　（ふうじんのたつまき・らいじんのいかづち）

右手に持っている　双剣　風丸を振り回すように高速で回転し、竜巻を起こす。
ベルケロスが竜巻で舞い上がった瞬間、左手に持っている　双剣　雷電を真上から振り下ろす。
すると…

ピシャーー？

ベルケロスに向かって雷が落ちた。
だが…

シュッ

ベルケロスは雷を軽々と避ける。
が、しかし、それを待っていたように、音速のスピードで弾丸がベルケロスにヒットし、貫く。

ジャ「どうだい？僕のレールガンの威力は。」

ジャックが持っている物、それはレールガンと言う、弾丸を音速で飛ばす科学兵器である。
だが、ベルケロスはまだ立っていた。凄まじい生命力である。しかし、優はそれを待ち構えていた。そして…

優「波動！！」

優はそう叫び、右手から、青い気を放った。
その　気　は、ベルケロスをただの肉片に変えた。

アル「ベルちゃん？」

ジャ「そこまでだ！」

ベルケロスから落ちてしまったアルベをジャックはレールガンを構え、アルベの動きを止めた。

ジャ「何か言う事はあるかい？」

アル「た、助けてくれ？」

ジャ「すまない…無理な質問だ。」

アル「！！！」

バシーーン？

ジャックは容赦なく、レールガンの引き金をひいた。

優・茜「先生恐え～？」

これにて一件落着。次回もお楽しみに。

～続く～

第４話　まだまだだ！二人の脇役　牛尾とジャック！（後書き）

お疲れ様です。
次回は優がまた闘います。
必殺技がたくさん炸裂します。
どれも威力があり得ないです。
それだけです。
では、また次回。

第5話　怒れ！優！仲間の為に！（前書き）

今回は優が怒ります。
覚醒はしませんが、かなり力を出します。
敵が可哀想になるくらいに。

それでは、どうぞ。

第5話　怒れ！優！仲間の為に！

○○学園の教室にて

また誰かが監視しているようだ。

？「なかなかやるな、あいつら。」

？「ふふふ…そうだろ？彼らは君が思っている以上に強い。特に優と言う少年、彼はかなり強い。今までの闘いで一度も本気を出してないんだ。」

？「うっそ～？結構出してたように見えたけど？」

？「君は何もわかってないな。なら、証明してあげるよ、彼の力を。」

～優視点～

優「はっ　　ははっ…ハックション？う～～…」

今日、俺は風邪をひいてしまった。

優「う～ん…ダル…マジ　ダルビッシュ」

～ｏｕｔｓｉｄｅ～

その頃…

茜「ねぇちょっと優　て、あれ？今日優は？」

ア「今日は風邪で休むそうでス。」

茜「あ　そう。あ！ねぇ、これ見て！」

茜はそう言うと、中指にはめている指輪をアントニオンに見せた。

ア「茜さん、それは？」

茜「ふふ、いいでしょ？道を歩いてたらみつけたの！すごく綺麗だから勿体無いと思ってひろったの！」

ア「確かに綺麗ですネ！でも、ちょっと不吉です。」

アントニオンは黒く輝く指輪を見てそう言った。
その時…

ズガーン！

爆音は校庭からした。

茜「またなの？懲りないな～全く！」

ア「そんな事より、委員長、早く行きましょウ！」

牛「えっ？あ、ああ。」

ジャ「僕も行くよ。」

茜「よし、じゃあ行こう！」

茜達は校庭に走って行った。
が、目の前の光景に茜達は驚く。

茜「何これ…何もいないじゃない？」

ジャ「どうやら爆発は本物のみたいだ。」

と、その時！

パーーーン

茜・ア・牛・ジャ「うわっ？」

茜がはめている指輪が突如光りだした。
光りが止んだ時、茜達の目の前には、なんと…

茜「あれは！私？」

ア「僕がいル…」

牛「あれって、俺じゃないか？」

ジャ「何だ！これは？」

茜達の目の前にいた者…それは自分自身であった。色は黒いが、姿形は茜達その物である。

偽　茜・ア・牛・ジャ「・・・・・・　（笑）　」

その頃、優は…

タッタッタッ

優「ものすっげぇ嫌な予感したんだけど、あいつら、大丈夫かなぁ

…」

優は風邪にも関わらず、悪い予感の元凶である、学園へと急ぐ。
学園へ着いた優が見た光景…それは…

優「…あ…茜！　アントニオン！　牛尾！　先生！」

なんと、そこには、茜達のボロボロな姿があった。優は茜達に駆け寄った。

優「おい？大丈夫か？一体何があった？」

ジャ「優…君…き…きちゃ…ダメだ…」

茜「…優…お願い…逃げて…」

ア「は…早く…逃げて…ください！」

優「・・・」

牛「何やってんだ…早く行け…」

茜達が逃げるように言い放っているうちに、茜達の偽物、ドッペルゲンガーが戻って来た。

牛「くそ…戻って来やがった。」

茜「優…早く…！」

偽　茜・ア・牛・ジャ「・・・　（笑）　」

優はドッペルゲンガーを見た瞬間、抑えられない程の怒りが込み上がる。

優「てめえらか、俺の親友を…よくも…よくも！！！」

偽　茜・ア・牛・ジャ「・・・　（殺）　」

優「う～　よくも～～～！！！！！」

ズバーーーン！！！

優は身体全体から青い気を放つ。
その気は触れるだけでも相手消し飛ばせる程の威力を持っていた。

偽　茜・ア・牛・ジャ「・・・　（驚）　」

優「覚悟は…できてんだろうな？」

スバッ

そう言った瞬間、ドッペルゲンガーの牛尾がこっちに向かって来た。

優「失せろ！」

バーーーン！！！

優がドッペルゲンガーに向かって波動を放つ。
そして、波動により、ドッペルゲンガーは塵も残らず消えた。

優「さあ、次に消えたい奴は来い。」

偽　茜「・・・　（殺）　」

今度はドッペルゲンガーの茜が攻撃をしてきた。

サササッ

ドッペルゲンガーが繰り出す攻撃を軽々と避ける優。そして反撃。

優「これをくらえ？」
「波動拳？」

優はパンチを繰り出すと同時に青い気弾を放つ。
放った気弾は敵目掛け一直線に飛んで行く。
だが、ドッペルゲンガーは飛んで来る気弾をジャンプでかわした。

優「うぉぉおおらあああ！！！」

優は再び青い気弾を放つ、が、今度は数え切れない程の気弾を放った。

優「波動百烈拳？」

信じられない程の数の気弾をドッペルゲンガーは避けられるはずも無く、全弾命中、茜のドッペルゲンガーも消え去った。
隙を見たジャックのドッペルゲンガーはレールガンを構えた。が
その瞬間…

優「うぜえんだよ！！！」
「翔龍波！！！」

優はジャックのドッペルゲンガー目掛け、龍の形をした波動を放った。

ガキン？

龍の形をした波動はドッペルゲンガーを喰らいそして…

ジャキーン？

喰らった敵を貫く。貫かれたドッペルゲンガーは跡形も無く消え去った。
それと同時にまた新たなドッペルゲンガーが指輪から生成された。
そのドッペルゲンガーは優だった。

偽　優「・・・　（殺）　」

優「なあ、お前、究極って知ってるか？」

偽　優「？」

優「じゃあ…」

優「俺が究極を見せてやるよ！！！」

スバッ

ドッペルゲンガーは優に向かってダッシュ。攻撃を数回繰り出す。

ササササッ

だが、優はドッペルゲンガーの繰り出した攻撃を全てかわし、アッパーをドッペルゲンガーの腹に当て、上に上げる。拳を引き、再び攻撃体制を取る。そして…

優「これが俺の究極だ～！！」

「滅龍拳！！！」

優はドッペルゲンガーに向かってジャンプし、アッパーを繰り出す。それと同時に龍の形をした青黒い波動が優を包み込み、優自身が飛翔する龍と化す。そして…

優「消えろ～～！！！！！」

バシューーン！！！

龍の形をした青黒い波動がドッペルゲンガーを貫き、消し飛ばす。

スタ

着地した優は、こう言った。

優「みんな、大丈夫か？」

一方、それを見ていた謎の人物達は…

？「・・・　（驚）　」

？「どうだい？彼の力は？」

？「信じられないわ…あの子があんな力を持っていた何て。」

？「かなり強くなって来たね、でもまだ足りない、また少し送ると

するよ。」

〜続く〜

第5話　怒れ！優！仲間の為に！（後書き）

次回は武器や技の紹介をします。
本編は少し休みます。
暇だったら、少しやります。

では、また次回。

技や武器の紹介（前書き）

優「なあ、技や武器はまだそんな出てないのに、何でこれをやるんだ？」

作者「それはこれから出てくる技や武器の紹介も含めるからです。」

優「そう言う事だそうだ、みんな、見て行ってやってくれ。」

作者「僕からもお願いします。それではどうぞ。」

技や武器の紹介

滝沢　優

武器：無い　（強いて言うなら　素手　）

身体能力が常人の１０倍の為、普通はできないことも簡単にできる。

技

波動

手から青い気を放ち、敵の外部と内部を同時に破壊する。

波動拳

波動と違い、威力が無く、外部しか破壊できないが、高速で飛ぶ為、避けられにくい。

必殺技

（翔龍波）

波動拳の必殺タイプ　形が飛翔する龍のような技。波動と同じく、外部と内部を破壊する。拳から放たれた龍は敵を　喰らい　、そして　貫く　。その為、これをくらって生きてる奴は相当鍛えてる奴かバケモノぐらいである。

（波動百烈拳）
波動拳を百弾撃ち出す。高速で飛ぶ波動拳が弾幕のように撃ちだされる為、避ける事は不可能。

（滅龍拳）
翔龍波の強化技。空中にいる敵目掛け、拳を相手に向けた瞬間、自らが飛翔する龍と化す。この龍も波動でできている。青黒い波動の龍が敵を貫く。

（究極かめはめ破）
悟〇の必殺技では無く、凄まじい程の威力を持つ技。右手首と左手首を合わせて腰の辺りに持っていき、気を溜める。気は溜め続けると、優の身長と変わらない程に巨大化する。放つと、縦幅　横幅７ｍの巨大な波動を放つ。これをくらって生きてる事は２００％不可能。さらに、両手を片手にして、全ての力を放つ。これは解放と言う最後の技。これをすると、究極かめはめ破は、縦幅横幅ともに１２ｍになり、全てを消し去る。

大島　茜
龍虎　二刀流の伝承者。いつもは刀を剣道用の袋に締まっている。

武器：刀と剣

名刀　（朱雀）　伝説の四聖獣の中の一匹、朱雀の刀。斬れ味は、これぞ業物と言う程の物で、世界一硬い鉱石、オリハルコンをも真っ二つにする。炎の力を持っている。

妖刀　（無幻）　持つ者の命を吸い取る刀。茜は無幻を使う時に自分の体力を注ぐ。そうすると、凄まじい程の力を持ち、斬られる者の命を確実に奪う。昔は無限の幻を操る刀であり、持つ者に禍々しい幻を、斬られる者は傷口からおぞましい物が溢れ出す幻を見せた。

（風雷）　全長７０ｃｍ　（二つ共）

双剣　（風丸）　（かぜまる）
風雷の中の一つ。風神を宿らせる剣。風を操る。

双剣　（雷電）　（らいでん）
風雷の中の一つ。雷神を宿らせる剣。雷を操る。

技

（二天一流の極み）
相手の攻撃を見切り、二刀流の一撃を見舞うカウンター技。

（次元斬）　（じげんざん）
触れずに相手を切り裂く技。達人が使うと空間が裂ける事からついた名。

必殺技
攻式一ノ型　（朱雀炎舞）　（スザクえんぶ）
朱雀と無幻に炎を灯らせ、自ら回転しながら敵を斬り上げる。斬られた相手は火だるまになる。

攻式二ノ型　（風神の竜巻・雷神の雷鎚）　（ふうじんのたつまき・らいじんのいかづち）
風丸を横に持ち、自ら高速回転する事で竜巻を起こし、敵を巻き上げる。巻き上げた直後に雷電を振り下ろし、雷鎚を敵の真上から落とす技。

守式一ノ型　（四聖獣の閃き）　（よんせいじゅうのひらめき）
朱雀を自分の真上に飾し、
朱雀、玄武、白虎、青龍を呼び出す事により、それぞれが持つ属性が強化される。
朱雀：炎の強化　（耐性）
玄武：水の強化　（耐性）
白虎：攻の強化
青龍：守の強化

守式二ノ型　（風切の壁・稲妻の罠）
（かぜきりのかべ・いなずまのわな）
風神・雷神を呼び出し、風切の壁を自分の周り展開。稲妻の罠をバラバラに配置する。
稲妻の罠は少しでも触れるとその場所に稲妻がはしり相手を痺れさせる。風切の壁は触れようとするだけでバラバラに切り裂かれる。

アントニオン・ライブラリー
サイボーグなので、ある程度の強い攻撃は平気。

武器：銃器　（自分自身）

技
（ミサイルボンバー）
アフロヘアーからミサイルをだすと言う驚愕の技。少し小型のミサイルだが、威力は通常のロケットランチャーより強い。

（アイレーザー）
名前の通り目からレーザー光線を放つ。レーザーは辺り一面を焼け野原にする程。

必殺技
（マインドクラッシュ）
正式には　クラッシュ・ザ・ヴォルケイノ　が正しい。指にエネルギーを溜めて、指パッチンをした瞬間、指に溜めていたエネルギーを敵の足元に誘導、そしてエネルギー爆発を起こす。威力は核爆弾と変わらない。この技は1度に2回しか使えない。2回以上使うと、オーバーヒートする。

板野　　牛尾
闘う事はできないが、拾った角を使い、身体能力を上げて闘う事ができる。

武器：角　　アクセサリーのちっちゃい角

技
（猛牛突き）
頭に取り付けた角を伸ばして相手に向かって突進する。角は3mもあるので、かなり貫通力がある。

（雷獅子撃）　（らいししげき）

突き刺した角から１０万ボルトに及ぶ電撃を流し込む。巨大な敵に対してとても有効。（デカすぎるのはＮＧ）

必殺技
（ライトニング・ボルテックス）
雷の魔人に変身する。翼が生えているので、空も飛べる。手から電撃を撃てる上に、電撃の全てを操れる。雷を利用して武器も作れる。

ジャック・バラン
運動が全くできないが、科学兵器を使い、敵を一網打尽にする。

武器：レールガン
電気を使う事で通常は飛ばせない速度で撃ち出せる。貫通力はＮｏ．１。

レーザーガン
未来の幻想武器。チャージをすると、あり得ない範囲と威力を発揮する。

キャッスルブレイカー
一発で巨大な城を撃ち崩す最強の科学兵器。チャージに時間がかかるが、その威力は目を見張る物がある。

作者「ちなみにめんどくさいのもあったので、書いてない事もあります。それは次回に。では。

〜続く〜

技や武器の紹介（後書き）

次回は茜の新武器登場。
ようやく揃います。
それでは。

第６話　集え四聖獣！茜の手の元に。（前書き）

茜の新武器登場です。
武器はこれ以上出ません。
それだけです。
ではどうぞ。

第6話　集え四聖獣！茜の手の元に。

〇〇学園の体育館にて

優「あ～…めんど…」

今俺達は学園祭の準備をしている。
とてもめんどくさい。楽しいから別に良いのだが。それにしても、あの指輪、偶然拾ったにしてはあまりにも怪しい。どう考えても、誰かが送りつけてるとしか思えない。でもあの偽物野郎達の一件から3日経っている。少しだけ平和になったのだろうか。

茜「優？何ボーっとしてんの？早く運ぼ。」

ア「優さン、良かったら手伝いましょうカ？」

優「いや、大丈夫だ。」

ハッキリ言って、今どうでもいい事を俺は考えていた。明日は学園祭。今日も含めて明日は平和な一日にしたい。いや、そうある事を願いたい。

？「ねぇ、ちょっといい？」

後ろから女の子の声が聞こえる。振り返るとそこには茜と同じくらいの女の子がいた。

？「あなたが滝沢　優ね？」

優「あぁ、そうだけど、何か用？」

？「あなたを殺す。」

優「？」

少女はそう言うと、俺にナイフを向けた。

？「ついてきて。」

優「行きゃ良いんだろ。」

茜「待ってくれない？」

その時、茜が少女を停めた。

?「誰?」

茜「私は優の親友。その手を離してくれない?」

?「嫌だと言ったら?」

茜「外に出て。」

?「いいわ。」

茜「優はじっとしてて。」

茜はそう言うと、少女と一緒に校庭に出て行った。

～outside～

二人はそれぞれ武器を持つ。茜は刀の朱雀と無幻を抜き、少女は暗器を構える。

茜「自己紹介をしましょうか。私は大島　茜。」

？「私は黒川　沙月（くろかわ　さつき）　これでいいかしら？」

お互いの自己紹介を済ませると、静かに相手に自分の武器を向ける。
そして…

スタタッ

沙月が走り出す。それに合わせて茜も突っ込む。

ガキン？

互いの武器がぶつかり合う。茜は刀に対して沙月は短いナイフで闘う。茜は自分が沙月より弱いとわかる。だが、それでも闘わなければならない。掛け替えのない友のために…

ギリギリ…

茜「う〜…く！」

徐々に押され始める茜。そしてついに…

ガン！

沙月に押し出される茜。沙月はその隙を見逃さず攻める。

沙「暗殺秘奥義！」
「レクイエムスラスター！」

沙月はナイフを投げる、するとナイフは急に消える。

茜「？」

だがナイフは消えているのではなく、茜の腕に突き刺さっていた。

茜「い…痛ッ？」

沙「無駄よ、あなたは私に勝てない。」

絶対絶命と思った…その時…

バシン！

牛「茜！借りを返すぞ！」

牛尾は沙月に向かって猛牛突きを行った。

牛「ここで諦めてどうする？お前は何の為に闘っているのか、考えてみろ。」

茜はその一言で立ち上がる。

茜「そうね、私は諦めない。どんな敵でも、この刀で…断ち斬る！」

茜はそう言うと、無幻をしまい、剣道用の袋から三本の刀を取り出した。

茜「朱雀、玄武、白虎、青龍、私に力を貸して！」

茜が取り出した刀は朱雀と同じ　玄武、白虎、青龍、だった。
（玄武）は水の力を持っている
（白虎）は1撃が3撃分になる
（青龍）は聖なる力でリーチが伸びる

茜は朱雀、玄武、白虎、青龍、を地面に突き刺し…

茜「龍虎　二刀流！守式一ノ型！」
「四聖獣の閃き」

茜は聖なる光の衣をまとった。
そして…

茜「龍虎二刀流！攻式三ノ型！」
「聖獣閃？」

光の衣は朱雀、玄武、白虎、青龍の形を描き、茜の中に入り込む。
茜は沙月に向かって、刀を振り下ろす。そして…

茜「一閃！！！」

ズバン？

四聖獣全ての力を帯びた刀は沙月を叩いた。
沙月はそのまま力尽きた。
後に朱雀、玄武、白虎、青龍の刀が一つの刀となり、その名は（聖獣刀）と名付けられた。

〜続く〜

第６話　集え四聖獣！茜の手の元に。（後書き）

次回は学園祭のお話しです。
今まで学校らしいとこが無かったので。
以上です。それでは。

特別話　楽しい×2学園祭！（前書き）

まずはお詫びをしなければいけません。
誤字、脱字や駄作な文章に付き合ってくださり、本当にありがとうございます！
そしてすいませんm（＿＿）m
この次回で物語の後半です。
それでは…

特別話　楽しい×2学園祭！

〇〇学園の教室にて

～優視点～オンリー

今日は待ちに待った学園祭！１０月〇日、９時に開催した。他校の生徒も入り、学園祭を楽しむ中、俺達は、静かだった。
理由は、出しものがお化け屋敷だからである。
俺はお店などが良いと言ったのだが…

優「絶対に料理の店が良いだろ。そっちのほうが楽しいしよ。」

茜「いやいや、絶対にお化け屋敷が良い！お店は材料とかのお金がかかるけど、お化け屋敷はお金がかからない！」

優「お前はバカか？お化け屋敷だってセットとか衣装で金掛かるじゃねぇか！」

茜「そんな事言うけど、あんた料理できんの？」

優「残念ながら料理番組に出れる程俺は料理がうまい。近所の人も俺の料理の腕を認めている。」

茜「何言ってんの？近所の人が気をつかってるかもしれないじゃん！」

優「近所の人達に限ってそんな事は絶対無い。」

茜「なにお～！！」

優「なにを～！！」

ア「あの～二人共落ち着いテ…「うるせぇ（うるさい）！！！」ゴメンなさい…」

牛「二人共～…落ち着けーー？」

優・茜「うわっ？」

牛「そんなに言うならジャンケンで決めろ！恨みっこ無しでな。」

優・茜「ん～、最初はグージャンケンぽい！」

茜「い…やったー？」

優「くそ…何でだ…」

茜「じゃあ、お化け屋敷で決定ね！」

と言う訳だ…くそ…何であの時俺はグーを出さなかったんだ…ま、今更悔んでも仕方ない。今はやる事に集中しなければ…
ちなみに俺は声を低くできると言う理由で死神の役をやらされている。死神は別に声低いとは思はないんだが…

茜「じゃあ、配置はこれでＯＫね。後はみんなの演技力にかかってるからね。」

優・ア・その他「は～い。」

茜「じゃあ…お化け屋敷の始まり～！」

茜は廊下に出てそう言った。
まず一組が入って来た。ワクワクしている様子。
最初は初歩的な部分、ゾンビが突然出てくる仕掛け。これに一組目はビックリする。ゾンビは追いかけては来ないが、あまりに突然の事なので、一組目の二人は走って行ってしまった。
次の二組目は男女のカップルだ。最初の仕掛けは難なくクリアしたが、その次の仕掛けは死神の声、つまり、俺の声、俺は出せる限りの低い声で精一杯喋った。

優「貴様達の…命を貰う…」

この声に対してカップルは恐がり半分で俺の声に興味を沸かしているようだ。そんなに珍しいか？俺の声が？ちなみにアントニオンはフランケンシュタインで、三組目の二人が人形だと思い通り過ぎてしまった。…何も言うまい…

～3時間後～

学園祭は無事終了した。お化け屋敷も予想以上の反響だった。本当に楽しい一日で終わった。

～続く～

特別話　楽しい×2学園祭！（後書き）

次回は牛尾が覚醒します。
覚醒の神髄は変身にありって感じです。
ではまた次回。

第7話　牛尾覚醒！目覚めた力！（前書き）

今回は牛尾の力が目覚めます。
脇役ですけど。
それでは、どうぞ。

第7話　牛尾覚醒！目覚めた力！

○○学園の教室にて

昨日の学園祭はかなり良かった。だけどまた、つまらない日々になった事で少し溜め息が出る。

優「はぁ～…」

茜「どうしたの？溜め息何かついて。」

茜はそう話掛けてくる。

優「ある種の暇さ。」

茜「何それ？」

優「・・・」

ア「二人共、話しの途中すみませン。」

アントニオンがそう話掛けてきた。

優「何だよ、アントニー。」

ア「実は…」

茜「何かあったの？」

ア「実は、先生達がみんな居ないんでス。」

優「は？何言ってんだよ？さっきまで先生廊下歩いてたぞ。」

ア「それが職員室へ行っても誰も居ないんでス。ジャック先生も、姿が見えないんでス。」

茜「そう言えば、もう9時だって言うのに、まだ授業してないよね。」

そんな話をしていると一人の先生がやって来た。

先生「みんな席につけ！」

優「ん？先生だ。」

茜「アントニオンこれは？」

ア「・・・」

居なくなった筈の先生が居る。どうやらほかのクラスにも先生はいるようだ。

先生「それでは、出席をとる。」

先生がそう言った瞬間、場の空気が変わった。
俺や茜やアントニオンや牛尾は何とも無いが、みんなはうつむいている。すると…

先生「ククク…」

先生は不敵に笑った。怪しい、凄く怪しい。

？「かかったな貴様ら？」

先生が突如変わり、黒い怪物に姿を変えた。

優「誰だお前は！」

？「私はブラック伯爵、お前達を倒しに来た。」

甲高い声でそう言うブラック伯爵とやら…

ブ「お前達を操る事は出来なかったが、こいつらさえ操れれば、お前達はこの私に手を出せまい。」

優「クソずりぃ…」

ブ「いくらでも言え、闘いなど勝てば良いのだからな。」

みんなが操られている為、誰もいない校庭に俺達はに逃げた。

～outside～

優達は校庭に逃げたが、すぐに後ろからブラック伯爵とクラスメイトがやって来た。

ブ「逃げても無駄だ。お前達はここで死ぬのだ！」

優「ったく！」

茜「みんなが…」

ア「一体どうしたラ…」

その時…

牛「俺がどうにかする。」

牛尾がそう言い出した。

優「牛尾…お前…」

牛「俺だって良いところ見せてやりてぇからな。」

牛尾はそう言うと、深呼吸をし、体に力を込めた。

牛「はぁぁぁ…」

すると牛尾の身体に電流が流れ始めた。牛尾は身体の電流をどんどん強め、電流が身体を包む形になる。そして…

牛「うぉぉおおおお！！！」

ピシャーーン？

全身から電流が流れ、解き放たれる。そして流れる電流に牛尾の身体は包み込まれ、そして…

バシーーン？

牛尾の姿は黄色に光る雷の魔人と化した。
姿は、背は高く、爪は鋭く、背中には翼が生えていた。

牛「これが俺がの覚醒技！」
「ライトニング・ボルテックス！！」

ブ「こ…これは…」

牛「せっかくこの姿になったんだ。楽しませてくれよ。」

牛尾はそう言うと、空を翔び、手から雷を放った。

ブ「何て攻撃だ…」

牛「おっと、これじゃあみんなに雷が行っちまう、とすると、方法

は一つ…」

牛尾は雷を操り、手の中で槍を作りだした。

ブ「・・・？」

牛「これでもくらえ？」

牛尾は力一杯ブラック伯爵に向かって雷の槍を投げた。

ブ「何？」

槍は伯爵のマントをかすめた。が牛尾は今度は雷のナイフをたくさん投げた。
今度は伯爵に幾つか刺さった。これを好機とみた牛尾は…

牛「これでトドメだ?」
「クライシス・ギガボルト」

牛尾は自分の頭上に雷の球を作りだす、そして作りだした雷の球をブラック伯爵に投げ付けた。

ブ「クソ…こんな物!」

ブラック伯爵は雷の球を両手で受け止めた。
だが牛尾はそれを待っていた。

牛「これでどうだーーー？」

牛尾は雷の球に力を思い切り注ぎ込むと、雷の球は倍の大きさに変化した。

ブ「？」

大きさが倍になった雷球はブラック伯爵を呑み込んだ。そこには黒い跡しか無かった。
そして、クラスメイトは目を覚まし、何事も無かったかのように教

室に戻って行った。

牛「あ～キツイ…さすがに変身は疲れるな。」

優「雷の魔人って奴だな。」

茜「私の風雷とかぶってんだけど？」

ア「でも、ライトニング・ボルテックス　て、凄く良いですネ。」

牛「褒めるのか貶すのかどっちかにしてくれ！」

〜続く〜

第7話　牛尾覚醒！目覚めた力！（後書き）

今回で物語の後半です。
次回はジャック先生が撃ちまくります。
それでは、また次回。

第8話　大暴れ！アントニオンとジャック！（前書き）

どうもこんにちは。
今回を含めて後3話です。
ジャック先生大暴れ。
アントニオンも暴れます。
それではどうぞ。

第8話　大暴れ！アントニオンとジャック！

○○学園の教室にて

～ｏｕｔｓｉｄｅ～

例の謎の三人が学園を監視中…

？「さてさて、どうするの？これまで送った刺客は優とかその仲間にみ～んなやられちゃってるわよ？もう送る刺客が少なくなってきたし…」

？「フフフ…でも、それが良いんだよ。最後には僕達が彼らと闘うのだから。」

？「…まあいい、後に楽しめるなら、問題無い。」

？「まあ私たちはこの地球に強い相手を探しに来たんだもんね、あの子達が強ければ、確かに満足よね。」

？「侵略も理由の一つだがな。」

優「・・・」

何だか最近誰かに見られている感覚が強いのだが…
俺の直感が鋭くなっているのか、この頃、何がどうなのか直感でわかるようになっている。
上から物が降ってきても直感でわかって避けれる。その直感が何かを感じとっている。

ジャ「優君、茜ちゃん、アントニオン、ちょっといいかい？」

優「先生、また何かあったのか？」

ジャ「君達は奇妙だと思わないかい？学園に敵がやってくるたびに君達を狙って闘うのを。どう考えても誰かが敵を送っているとしか考えようが無い。」

茜「あ！確かに！」

ア「それは僕もそう思ってましタ。」

優「だとすると、また今日も来るって事か？」

ジャ「そうなる。」

優達がそんな話をしていると…

パーーン

校庭に眩い光が…

優「何だ？」

その光から何者かの影が…

？「さあ、出てこい強者よ…我を愉しませよ。」

優「噂をすれば何とやら…行こうぜ。」

優達は校庭へ出た。

優「で、あんたは誰なんだ？」

？「我はバルカス…お前達の名は何と申すか？」

優「俺の名前は瀧沢　優。」

茜「私は大島　茜。」

ア「僕はアントニオン・ライブラリーでス。」

牛「俺は板野　牛尾だ。」

ジャ「僕はジャック・バラン、さ…始めよう。」

それぞれが名前を言う。そして…

牛「先手必勝！」

牛尾がバルカスに攻めかかる。
ところが…

牛「何で…」

突然牛尾の身体が動かなくなった。

バル「サイコキネシス。」

何と、バルカスが牛尾の動きを止めていた。

茜「超能力？」

バル「お前達では私に触れら無い。」

優「それはどうかな？」

そう言うと優は波動を放った。

バル「な、何だ？この攻撃は？」

優「波動だ？お前には防げ無い？」

波動はバルカスの身体を貫く。が…

バル「サイコバリアー！」

バリアーを張りギリギリで塞いだ、と、同時にバリアーが割れる。

優「今だ！」

ジャ「新しく作ったレーザーガンを試させてもらうよ。」

ジャックはショットガン位のレーザーガンを構えた。

ビーーー！

バルカス目掛け発射。それに続きアントニオンも…

ア「アイレーザー？」

ビーーー！

目からビームを放つ。

バル「サイコバリアー！」

が、バルカスにバリアーを張られ、レーザーが防がれる。

ジャ「アントニオンそのまま頼むよ！」

ア「はイ？」

アントニオンはビームを放ち続ける。
バルカスは防ぎ続ける。
そこに、ジャックがロケットランチャー並の武器を持って現れた。

ジャ「キャッスルブレイカーは溜めるのに少し時間が掛かるんだけ

ど、その状態なら、安心して溜められるよ。」

ジャックはキャッスルブレイカーを構え、チャージを開始した。徐々にパワーが溜まって行く。溜まって行くにつれて銃口に光が集まっていく。

バル「まずい！」

バルカスはチャージを止めようとするが…

ア「気を抜かないでくださイ？」

アントニオンはレーザーの威力を強める。

バル「くそ?」

その時…

ピーー

ジャ「チャージ完了。」

そして…

ジャ「ジャックポット！」

ボーーー？

ジャックのキャッスルブレイカーは極太レーザーを放ち、バルカスのバリアーを破り、バルカスを灰に変えた。

ジャ「ははっ…我ながら凄い威力だ。」

？「ああ、後一人だけになっちゃった。」

？「大丈夫さ。最後の一人は取っておきだよ。」

？「取っておきだと？」

？「まあ見てなよ。」

～続く～

第8話　大暴れ！アントニオンとジャック！（後書き）

次回は全員が闘います。
敵は…
では、また次回。

第9話　優達ピンチ！分身する敵現る。（前書き）

こんにちは。
今回は全員が闘います。
敵は分身。
それだけです。
ではどうぞ。

第9話　優達ピンチ！分身する敵現る。

○○学園の保健室にて

～outside～

？「最後は君だ。頑張ってくれよ。」

？「はい…お安い御用です。」

ササッ

？「じゃあ、私たちも準備をしましょう。」

？「そうだね。」

？「愉しませて貰おうじゃねぇか！」

優「・・・・」

茜「・・・・」

ア「・・・・」

牛「・・・・」

ジャ「・・・・」

優達は黙り込んでいた。真剣な面持ちで…

ジャ「とりあえず、今は何の心配もいらないが…またいつやって来るかと思うと…」

牛「ああ、でも、俺達なら、きっと大丈夫だろ！」

茜「そうは言うけど、敵はどんどん強くなっていってるし、またあのドッペルゲンガーみたいなのが出て来たら…」

優「大丈夫だ。その時はお前達に指一本触れさせない。」

ア「僕だって、先生のおかげで前よりパワーアップしましタ。きっと大丈夫でス。」

ジャ「まぁ、今のところ、敵が現れるのはこの時間帯だ。予想がハズレていなければ、敵はかならず来る。」

ジャックがそう言った、その時…

優「！！！」

優が気配を感じ取った。気配の先は校庭。優は保健室を飛び出して校庭に出る、そして…

？「やはり…お前なら、気づくと思った。」

後から茜、アントニオン、牛尾、ジャックが出て来た。

？「来たか…では、人数を増やそう…」

謎の人物はそう言うと、何と…彼を中心に半透明の分身が出てくる。
そしてその分身は半透明から物質化した。

？「私は…トラグベルク…ある御方の命でここにやって来た。」

優「ある人？」

ト「もし…お前が私を倒す事ができたなら…あの御方と闘う事を許そう。」

トラグベルクとその分身はそれぞれ茜、アントニオン、牛尾、ジャックへ向き構えた。

ト「来い…」

優「よし…」

ともに構える優達。そして…

優「はぁぁぁぁああああ！！」

優は力を溜めた、その力を両手に込める。

優「波動…百烈拳！！！」

優は百発の波動の弾を放った。

ト「あの御方が認めるだけある…だが足りん！」

シュッシュッ

トラグベルクは百発全てをかわした。

優「くそ…」

その頃茜達は…

茜「守式ニノ型？」
「風切の壁・稲妻の罠？」

茜は両腕を広げ、風切の壁を自分を包むように展開、稲妻の罠を様々な場所に設置した。

分身　ト「ぬるいぞ…」

トラグベルクは稲妻の罠を軽々と避け、風切の壁を破る。

茜「守式三ノ型？」
「聖獣壁？」

四聖獣が刀に宿り、聖獣刀となり、聖獣刀から放たれた力が壁となり、トラグベルクの攻撃を阻む。

パシーーン

トラグベルクの攻撃を聖獣壁が防ぐ。ところが…

ピキピキ…

壁が音をたてながらヒビが入る。そして…

バリーーン

壁が割れた。

ト「無駄だ。」

茜「まだまだ？」

「攻式四ノ型？」
「無限幻影剣！！！」

茜は無幻を抜き、自らの体力を注ぎ込み、力を込める。すると、茜の周りを回転しながら出現した。

ト「これは…？」

茜「避けきれる？」

シャシャシャシャ

無限に展開された幻影の剣がトラグベルクに向かって行く。

ト「く…ここまでか…」

幻影の剣は分身のトラグベルクを針の山にした。

その頃アントニオン、牛尾、ジャックが奮闘中…

ア「ク…」

牛「強ぇ…」

ト「どうした…その程度か…」

ト2「まだ本気では無い筈だ…」

ト3「立て…」

三人のトラグベルクの分身はそう言う。

牛「出してないだと？ならこれでどうだ？」
「ライトニング・ボルテックス？」

雷の魔人に変身した牛尾は猛スピードでトラグベルクへ飛んでいき…

牛「稲妻ラッシュ！」

ババババ！

牛尾は目にも止まらぬ速さでパンチを繰り出した。だがパンチはあっさりかわされてしまう。が…

牛「掛かったな！」

「クライシス・テラボルト！！！」

牛尾は僅かな隙を見つけ、そこに超巨大な雷球を即効で作りだし、トラグベルクへぶつける。

ト「バカな…」

トラグベルクは超巨大な雷球によって消え去った。

ジャ「アントニオン、ここは僕に任せろ。」

ア「先生？」

ジャックはトラグベルクへ向かって行き…

ジャ「はあ！！」

バーーン！

ト2「そんな武器で私を倒せると思ってるのか…」

トラグベルクはレールガンから撃たれた弾丸を手で受け止めようとした時…

ジャ「僕のレールガンを舐めないほうが良いよ。」

何と弾丸が手を貫き、トラグベルクに当たった。
ジャックはさらにレーザーガンを取り出し撃つ。

ビーーー

ト2「油断したか…」

トラグベルクはレーザーガンのレーザーによって貫かれた。

ア「僕も負けていられませんネ。」
「ミサイルボンバー！」

アントニオンはトラグベルクに向けてミサイルを撃った。

ト3「遅い…」

トラグベルクはミサイルを軽く避けた。が…

ア「油断しないで下さイ！」
「マインド・クラッシュ？」

アントニオンは指パッチンをしてトラグベルクの足元に爆発を起こした。

ト3「不覚だ…」

トラグベルクは爆発によって消え去った。

そして優…

優「これで決める。」

「翔龍波！」

優は拳に力と気を溜め、波動の龍を放つ。

ト「さすがだが遅い…」

サッ

トラグベルクは翔龍波を避ける。が…

優「考えが甘いぞ！」

優がそう言うと、翔龍波はトラグベルクのほうに曲がり、飛んで行った。

ト「フ…さすがだ…」

そして…

ガキン？

ジャキーーン！！！

波動の龍はトラグベルクを喰らい、そして貫いた。

牛「ダメだ…パワーが切れた…」

ジャ「僕ももう動けない…」

牛尾とジャックは体力が尽きたのか、地面にバタンと倒れた。その時…

？「は～い♪初めまして♪」

？「やっとか…」

？「やぁ、初めまして、優君。」

〜最終回へ〜

第9話　優達ピンチ！分身する敵現る。（後書き）

いよいよ次回で最終回。
最後の敵は学園を監視していた三人です。
闘うのも優、茜、アントニオンの三人。
ついに優の最後の必殺技を発動？
では、また次回。

最終回　これで最後だ！！放て優？究極の一撃を！！！（前書き）

最終回です。
今回は三人の死闘が繰り広げられます。
最後ですが…
ではどうぞ。

最終回　これで最後だ！！放て優？究極の一撃を！！！

最終対決…

優「誰だてめぇら！何で俺の名前を知っている！」

？「知っているさ、君が松阪　紫苑と闘い始めた時から…」

優「何だって？」

？「自己紹介をして無かったね、僕はアラストル…宇宙船に乗ってやって来た、闘う宇宙人さ。」

？「俺の名前はバルトス。」

？「私はマティスよ。」

一人はやや　やせ型の青年。
一人は身の丈２ｍもあるゴツい大男。
一人はとても美しい女性。

だが、その三人からは途轍もない何かを感じ取った優達。
本気でやらなきゃこっちが死ぬ状況。

茜「宇宙人て事は侵略しに来たって事？」

冗談半分　本気半分で茜が聞いた。

アラ「その通りだよ。」

アラストルは真顔で答えた。

優「マジかよ…」

マ「貴方達が私たちと闘わないと、この地球を支配すると言う事。」

バ「わかったか…」

アラストル達は顔は笑っているが、内心が本気だ。

優「わかった…闘ってやるよ…ただし、やるからには本気の闘いじ

ゃないとな…」

茜「そうね…私も全部を出し切る…」

ア「僕も…壊れたって構いません…」

優達は覚悟を決めた。今まで闘ってきた敵の中で一番最強の敵が目の前にいる。
自分が例え、どんなに傷を負おうとも、力を尽きたとしても、闘い続けると心に誓って…
そして…

優「うぉぉおおおらあああああ！！！」

茜「はぁぁぁあああああ！！！」

ア「ィヤァァアアアアア！！！」

アラ「うぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

バ「グォォラアアアア！！！！」

マ「ほぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

一気に向かって行く。

優「アラストル！」

アラ「優君！」

マ「お嬢ちゃんは私が相手よ！」

茜「望むところ！」

バ「てめぇは俺が相手だ！」

ア「そうですカ！でハ？」

まず闘いが始まったのはアントニオンとバルトス。

ア「ミサイルボンバー！」

アントニオンは先に攻める、ところが…

バ「こんなおもちゃでどうするんだ？」

ア「そんナ…？」

バルトスはアントニオンが撃ったミサイルを片手で全て受け止めた。
そして受け止めたミサイルをアントニオンに投げつける。

ア「ク…」

ドガーーン！

茜「アントニオン？」

マ「気を抜かないで頂戴！」

マティスは剣を振りかぶった。

茜「守式四ノ型？」
「幻影の世？」

茜は無幻を構えた。その直後に濃い霧が立ち込める。茜の姿は霧の中に消えた。

マ「隠れる作戦ね。」

マティスは茜を探る。

マ「そこね！」

シュン

マティスは剣を振る、が、茜はマティスの後ろから現れた。

茜「甘い！」

マ「甘いのはそっちよ！」

茜「え…？」

何と茜はマティスの後ろを取った筈が、その隙を突かれ、さらに後ろを取られた。

マ「トリプル・ムーン！」

マティスの背後に三日月、半月、満月が現れた。

マ「クレッセントムーン！」

鋭い斬撃が茜を襲った。

スパン

茜「キャ？」

斬撃は茜の膝上を切った。

マ「ハーフムーン！」

斬撃は茜を叩く。

ドガン

茜「がふっ！」

茜は地面に叩きつけられた。

マ「止めよ！」
「フルムーン？」

斬撃は月の波動となり、茜にぶつかる。

ギャーーーン！

茜「あああああ！」

優「くそ？」

アラ「どうしたんだい？僕はこっちだよ！」

アラストルは優の隙を見逃さず、攻め込む。

アラ「旋風拳！」

アラストルは回転しながら拳を繰り出す。

ドガバキボガッ！！

優「ぶはっ！」

アラ「まだだよ！」
「コンボドライブ！」

アラストルは右ストレート、左ボディ、右アッパーで浮いた直後に…

ドゴッ！

優「ぐふっ？」

落ちる体制になった時に優の腹に全体重を乗せたパンチを叩き込む。

ズガーン！

優「ぐは？」

地面にぶつかり、跳ね返って再び中に舞う優。
アラストルは再び攻め込む。

アラ「これでトドメだ。」
「ドラゴンストライク？」

アラストルは渾身の力を拳に込めて優の腹に打ち込む。

ドゴッ

優「ぐっ！」

アラ「終わりだ。」

そう言うと、拳に力をさらに込める。

ズバーーッ！

拳から放たれた龍の波動が優の腹を貫く。

優「ぐふ…ぁあ…」

ドサッ

優は倒れた。

マ「なかなか愉しめたわ。」

バ「俺はガッカリだな！」

アラ「・・・」

三人が集まって会話をした、その時…

アラ「？」

優「まだ…終わってねぇよ！」

マ「？」

茜「全部を出し切って無いからね！」

バ「？」

ア「僕も自分の攻撃で死ぬ程、もろくありませン！」

優、茜、アントニオンは立ち上がる。

ア「アクセル全開でいきまス？」

茜「最後の五ノ型を見せてあげる！」

優「本気を見せてやる！！！」

アントニオンと茜はともにバルトス、マティスに向かって行き、優は巨大かつ、絶大な気を放つ。

優「さぁ、ここからが反撃だ　（よ）　（でス）！！！」

ア「終わりでス？」
「ファイナル・クラッシュ！！！」

アントニオンは指パッチンの構えを取るが、指が光を発し始めた。
そして…

パチンッ！

フオーー

バルトスの足元に眩しい光を発し…

ズガーーーーン！！！

今までに無い絶大なエネルギー爆発がバルトスを消し飛ばそうとす

る。

バ「くそ…が…」

バルトスは耐え切れず、爆発によって消え去った。

マ「バルトス！」

茜「気を抜かないで！」

茜「龍虎二刀流？守式五ノ型？」

「龍の爪・虎の牙？」

茜の周りに緑と黄のオーラが漂う。

マ「こんなもの！」

マティスは剣を構えて茜に向かう。が…

バシュ？

マティスの剣が茜に触れようとした瞬間に、マティスの右肘から先が無くなっている。

茜「終わりね？」
「龍虎二刀流？攻式五ノ型？」
「龍虎二天閃！！！」

茜が持つ全ての刀が中に浮き、背後に集まった。
そして茜が手をマティスに向けた瞬間…

スパパパパパパン！

マティスは跡形も無く切り裂かれた。

アラ「僕達も…決着をつけよう…」

優「ああ…」

スバッ

アラストルはダッシュで優に攻めかかる。が…

優「どうした？遅いぞ？」

アラ「な？」

今目の前に居た優が自分の真横に居る事に対し、非常に驚くアラストル。その瞬間…

ズガン！

アラ「ぶほっ？」

アラストルの腹の痛みが全身にまわり、激しい痛みになる。

優「喰らっとけ！」

「翔龍波？」

優の繰り出した拳から放たれた波動の龍がアラストルを喰らい、貫く。

ガキン

ジャキーーン？

アラ「く…あ…」

優「まだだ！」
「滅龍拳？」

優は間髪いれずに滅龍拳を放つ。

ズバーーン！！！

アラ「う…うく…」

アラストルは信じられない力を身に受け、膝ま付く。

優「トドメだ。」

優は手首と手首を合わせ、腰に持っていき、気を溜める。
その気はどんどん大きくなり、最終的には優と同じ大きさになった。
そして…

ピシャーーン

優「これが俺の…究極だ〜〜〜〜！！！」
「究極かめはめ破〜〜〜！！！！！」

究極の波動は凄まじく巨大化し、アラストルを簡単に呑み込む。

優「これで終わりだ〜〜〜〜！！！」

「解放〜〜！！！！！」

優は両手を片手にし、抑えていた力を全て解放。
波動はかなり大きい学園を圧倒的な大きさで簡単に呑み込む。アラストルは塵一つ残らず消えた。

優「ふー…」

優はあれだけの大きな波動を放っておきながら、息一つ乱さない。

茜「やったね！」

ア「はイ！」

優「ああ、そうだな。」

優達は最強の敵の宇宙人を死闘の末、倒した。
彼等は学園を…いや、地球を救った。
だが…彼等はまた壮絶な運命に悩まされる事になる。

それはこの日から1週間後に起こる出来事。

～続編へ～

最終回　これで最後だ！！放て優？究極の一撃を！！！（後書き）

実はこれの続編を書きます。
タイトルは
超絶で最狂の三人が幻想入り　です。
一度でいいからやってみたかったんです。
もちろん、主人公は
優、茜、アントニオンの三人です。
牛尾とジャックは気にしないでください。
では、続編でまた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0604x/

超絶最狂学園

2011年10月6日09時25分発行